

受講者の既有知識・経験の活性化を軸にした課題構成 - 熊本大学大学院教授システム学専攻「基盤的教育論」を例に -

Assignments to Activate Learner's Prior Knowledge and Experiences -A Case of "Fundamentals of Pedagogy" in Instructional Systems Program-

鈴木 克明[†]

Katsuaki SUZUKI[†]

[†] 熊本大学大学院社会文化科学研究科

[†] Graduate School of Social and Cultural Sciences, Kumamoto University

Email: ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：受講者の既有知識・経験の活性化を軸にした課題構成について熊本大学大学院教授システム学専攻の基礎科目「基盤的教育論」を例に述べる。既有知識・経験の活性化は、インストラクショナルデザインの重要な原理の一つと指摘されており、数々の試みがなされている。本稿では、インターネット型大学院の講義に応用した場合の課題構成について紹介し、その効果をどのように調べていく可能性があるかについて考察する。

キーワード：高等教育 e-ラーニング インストラクショナルデザイン 教授理論 教育実践

1. はじめに

既有知識・経験の活性化は、インストラクショナルデザイン (ID) の重要な原理の一つと指摘されている。たとえば、メリルは、ID 第一原理の 5 要素のうちの一つに学習者がすでに知っている知識を動員するための「活性化 (Activation)」を掲げており、学習が成立するためには既知の内容を想起させることが不可欠であるとしている⁽¹⁾。

本稿では、e-ラーニング専門家の養成を目指して熊本大学に新設されたインターネット型大学院教授システム学専攻⁽²⁾の講義に応用した場合の課題構成について紹介し、その効果をどのように調べていく可能性があるかについて考察する。本専攻では、遠隔地で学ぶ社会人を主たる対象としているため、社会人にとって学びやすい環境を構築するための科目共通要件をシラバスガイドラインとして定めている⁽³⁾。成績評価については、複数のレポート課題のそれぞれを最低 6 割以上得点することが単位取得の最低条件と定められており、レポート課題には受講者相互の評価 (改善への意見を含む) を課すことが推奨されている。

2. 「基盤的教育論」の概要

「基盤的教育論」は、本専攻の入学生に期待されている教育学の基礎知識のない者に対して教職専門科目レベルの基礎を培う入門科目 (2 単位) として設置されており、教員免許を有する入学生は履修が免除される。Web サイトに公開されているシラバスを表 1 に示す。シラバスには、課題の内容と単位取得最低条件とともに、毎回の講義内容が示されている。15 回の講義内容は、導入、教育学の二大潮流、教育心理学の三大潮流、学習指導・評価論、まとめと振り返りの 5 ブロックに分割して提供され、ブロックは直列に系列化されている (図 1 を参照)。



図 1 「基盤的教育論」コーストップページ

3. 課題内容と回答傾向

本科目の課題は、基礎理論の理解 (課題 2) と相互評価などの貢献度 (課題 3) をその中核としながらも、既有知識・経験が本科目受講によってどのように変化したかを捉えさせるために科目履修前後に二つのリフレクションペーパーを設定した (課題 1 及び 4)。導入ブロックでは、基礎理論の学習に入る前に、自分の教育・被教育体験を振り返るペーパーの提出を求め、それを受講生相互にコメントさせることで自己紹介を兼ねた交流を促した (課題 1)。まとめのブロックでは、半期の学習を省察し、学びの成果について、自己の認識の変化と行動変容の予測としてまとめさせた (課題 4)。

開設初年度 (2006 年度) の受講生 20 名 (科目等履修生含む) の課題 1 の得点は、20 点満点中平均 17.3 点 (SD=2.0) で、提出者全員が合格基準 (6 割以上) を上回った (メット厳守・フォーマット厳守・タイトル・段落構成・誤字脱字の技術面 10 点と要求適合度・主張の裏づけの内容面 10 点：予め明記)。一方の課題 4 の得点は、提出者 17 名の平均が 30 点満点

中 21.1 点 (SD=2.9) であり、うち 1 名は 6 割未満であったため、再提出要求となった (のちに合格)。採点基準には内容面に「参考文献の適切な引用」が追加された (予め通知)。

相互コメント数 (本人による返信も含む) は、課題 1 では一人あたり平均 14.1 通 (SD=6.4) だったのに対し、課題 4 では期限超過の一人を除いた一人あたり平均は 7.1 通 (SD=3.4) であった。相互にやり取りが活発に行われ、省察の深化や提出物の質向上に役立っている可能性が示唆された。

4. 教育効果検証の可能性

本科目の初年度実践の結果として、予め設定・公表した評価基準を満たして中途脱落者 (登録者の 15%) を除く全員が単位取得を果たした。内容や方法を含む科目設計の全体としては一定の教育効果が得られたと言えよう。科目終了時アンケートを実施した結果、次年度の改善に向けてのアイデアもいくつか得ることができた。

一方で、既有知識・経験の省察を主たる教授方略として用いたことの効果や、相互コメントを課したことの効果はどのように確かめたらよいだろうか。終了時アンケートでは個別の要素についての反応も聴取しており、そこから主観的な印象については調査が可能である。アンケート回答者全員 (単位取得者の 47.1%) が「掲示板は有意義であった」、「相互コメントは有意義であった」を選択した。一方で、自由記述では「極論すれば、本科目 (本専攻?) のメインはこの部分にあると感じました」という肯定派と「受講者のコメントは表面的なものも多かった」とする限定的評価派もいることが分かった。

相互コメントの効果については、初稿と完成稿の差分に対して相互コメントの内容がどの程度貢献しているのかの分析をすることは (すべてが掲示板に残っている本専攻の性質上) 可能である。課題 1 で既有知識・経験を掘り起こしたことの効果については、課題 1 を課さない場合との比較で論じることが実施上困難であるが、科目履修前後の省察内容を比較することや最終レポートの中に自身の認識の変化についての記述がどの程度見られるのかを検討することで、ある程度可能かもしれない。この点は今後の課題としたい。

参考文献

- (1) 鈴木克明: “〔総説〕 e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン”, 日本教育工学会誌, Vol. 29, No. 3 (特集号: 実践段階の e-Learning), 197-205 (2005)
- (2) 鈴木克明: “遠隔大学院で論文指導をどう行うか: 熊本大学教授システム学専攻の事例から”, 教育システム情報学会研究報告, Vol. 22, No. 1, 43-46 (2007)
- (3) 北村士朗ほか: “e-Learning 専門家養成のための e-Learning 大学院における質保証への取組: 熊本大学大学院教授システム学専攻の事例”, メディア教育研究, Vol. 3, No. 2 (特集: e-Learning における高等教育の質保証への取組み), 25-35 (2007)

表 1 「基盤的教育論」公開シラバス

基盤的教育論 シラバス 単位数 2 担当教員: 鈴木 克明
必修/選択: 選択 開講年次: 1 年前期 前提科目: なし
教育学の視点から e-Learning 実践を点検するための基礎を培う。教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる。教育学の基礎知識が不足している入学生のための補講的基礎科目。

評価の方法

教員免許保持者は当科目単位取得相当とみなし受講を免除する (希望者は受講してもよい)。教員免許を保持しない者が受講免除を希望する場合は担当教員に申し出ること。

次の課題についての累積点数で評価する。ただし、すべての課題が合格点に達していることを単位取得条件とする。

【課題 1】リフレクションペーパーI(20 点)

講義第 2 回課題としてアップロードする。受講前の教育に関する自説 (考え方、哲学、見方、やり方など) をまとめる。つまり、現在 (学習指導に関する) 職務を実施する際のやり方、明示的・暗示的に寄せている期待、どうしてそのような考え方をもつに至ったか、自分自身が学習者として経験したこと、重要な教師との出会い、経験した教育課程やプログラムなどを述べる。参考文献を引用する必要はないが、上記の自説形成に強い影響を与えた書物等がある場合はそれを明記のこと。受講者同士で閲覧し、相互にコメントをつける。アップロードされたペーパーの中身と相互コメントの両方を採点の対象とする。

【課題 2】主要理論の理解(30 点)

毎回の講義資料として指定される文章についての問いに答え、理論をしっかりと理解したことを証明する。理論をよく理解していることを表現できたか、個人の経験に直結した解釈ができていくので評価する。

【課題 3】参加・貢献度(20 点)

講義期間中の BBS 上の書き込みにもどの程度積極的にコメントし、それが全体の議論の深まりに貢献したかを相互評価する。

【課題 4】リフレクションペーパーII(30 点)

講義第 15 回課題として第 1 稿を提出。他の受講者からの相互コメントを参考に改訂し、提出する。この講義を受けることによって自説がどのように変化・深化したかをまとめる。講義で学んだどの理論が最も影響を与えたか、自己の学習方法や学習指導に係る職務遂行に将来どのような変化が起きそうか、その理論がインパクトを与えた理由は何かなどを述べる。最終提出されたペーパーと相互コメントの両方を採点の対象とする。

内容

- 第 1 回 講義概要
- 第 2 回 リフレクションペーパーIの提出と相互コメント
- 第 3 回 教育学の 2 大潮流 (1) 系統主義と経験主義
- 第 4 回 教育学の 2 大潮流 (2) デューイの教育哲学
- 第 5 回 教育学の 2 大潮流 (3) 教育のパラドックス
- 第 6 回 学習心理学の 3 大潮流 (1) 行動主義: 代理強化とティーチングマシン
- 第 7 回 学習心理学の 3 大潮流 (2) 認知主義: 先行オーガナイザとスキーマ理論
- 第 8 回 学習心理学の 3 大潮流 (3) 構成主義: 正統的周辺参加と足場づくり
- 第 9 回 学習心理学の 3 大潮流 (4) 折衷主義: 学習科学とデザイン実験アプローチ
- 第 10 回 学習指導・評価論 (1) キャロルの時間モデルと完全習得学習
- 第 11 回 学習指導・評価論 (2) 学習目標の分類学と適性処遇交互作用
- 第 12 回 学習指導・評価論 (3) ポートフォリオとルーブリック
- 第 13 回 学習指導・評価論 (4) 教育メディア研究の知見とメディア選択
- 第 14 回 まとめ: 理論で実践はどう変わるか
- 第 15 回 リフレクションペーパーIIの仮提出と相互コメント

出典: http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/curriculum/04/syllabus_04.html